

ヤンデレ王子の逃げ腰シンデレラ

目次

第一章	ヤンデレ王子の逃げ腰シンデレラ	4
第二章	ヤンデレ王子の熟成期間	85
第三章	逃げ腰新婚生活	105
第四章	貢ぎ癖が止まらない	205
番外編	彼はプリンに命を懸ける	267

第一章 ヤンデレ王子の逃げ腰シンデレラ

1

長い人生には必ず、何度か転機が訪れる。

例えばそれは進学、就職、結婚といったライフイベントであったという人もいれば、信頼できる友人や恩師、または一冊の本との出会いであったという人もいるだろう。

今がまさに人生の転機だと自覚している場合もあれば、あとになってから、『あれが転機だった』と気付く場合もある。

そんな多種多様の転機だが、この物語のヒロインである彼女——高野^{たかの}寿々^{すず}にとつてのそれは一本のストローだった。

うんざりするくらいぐんぐんと気温が上がり、立っているだけでも汗ばむようになってきた五月末の水曜日。

ぎゅうぎゅうに押し込められた満員電車の中から、寿々は^は弾き出されるようにして地下鉄のホー

ムに降り立った。うしろでひとつにまとめていた髪が乱れていなかさつと触って確認し、肩から掛けたバッグを抱え直す。そしてはあ、とため息をついた。

「疲れた……もつと会社の近くに引越そうかなあ」

新卒で就職してから今年で五年目。毎日この時間、この路線で通勤しているが、いまだにこのすしづめ状態の電車には慣れない。

こんな満員電車では席に座れるはずもなく、当然立ちっぱなしだし、見知らぬ人と密着するのも気を遣う。揺れて倒れそうになった時には、見た目重視で選んだ高いヒールで踏ん張るのも大変だ。短い足を少しでも長く見せようとして先週末に買ったばかりだが、もう少し歩きやすいヒールの靴にするべきだったと思っている。

小さな後悔を胸に改札へ続く階段を上がると、連絡通路の壁面に巨大な化粧品広告が出ているのに気がついた。

昨日までなかったそれには、今人気の若手女優のキラキラした写真と共に『あなただつて、シンデレラになれる』というキャッチコピーが躍^はっている。誰より可愛い女優がそれと言っても説得力がないのでは？　なんてイジワルな考えが寿々の頭に浮かんで消えた。

「シンデレラ、かあ……」

シンデレラ、それは世の中の女性達の憧^{あこが}れである。

義理の母と姉達にいじめられていたシンデレラは、魔法使いの助けによって美しいドレスをまとい、かぼちゃの馬車に乗って舞踏会に出掛ける。

その舞踏会で王子様に見初められて結婚し、ハッピーエンド——というこの物語は、シンデレラ・ストーリーという雛形まで生み出した。

だが、自他共に認める平凡OLの寿々は思う。

お話は王子様と結婚して『めでたしめでたし』で終わったけれど、シンデレラは本当にずっと幸せだったのだろうか、と。

召使のような生活で大した教育も与えられていなかったらどう彼女は、突然投げ込まれた上流階級の生活に戸惑わなかったのだろうか。権力に群がる人々によつて足元を掬われることはなかったのだろうか。夫である王子との身分差や考え方の違いに、悩む瞬間はなかったのだろうか。

そう、人には自分に合ったレベルというものがある。

例えば寿々は、太すぎず細すぎないスタイルで、顔面偏差値は中の中。一度も染めたことのない黒髪をひとつにまとめて、清潔感のある服装を心がけているが流行には疎い。

こんな「超」がつくれベルの普通な自分は、誰が見ても王子様には相応しくないだろう。おとぎ話の世界だったら、せいぜい一言喋って退場する町娘Bといったところだ。

一応二十六歳という微妙な若さだけはあるが、大人しい性格のせいでこの年までまともな恋愛経験はない。一度も彼氏がいたことのない枯れ女となれば、華やかな男性には敬遠されるだろう。

だから寿々はずっと、自分の身の丈に合った人生プランを描いている。ごくごく普通の男性と結婚して、ごくごく普通のマンションを買って、ごくごく普通の安定した生活を送る。

ごくごく普通の自分にはそれが一番だと思っていたのに、なぜか今寿々は絶対に釣り合わない

王子様 に恋をしている。

相手は、どんなに手を伸ばしても届かない雲の上の人。彼に比べたら自分なんて、控えめに言っても鼻をかんだあとのティッシュ程度の存在。

むしろ好きになつてしまつてごめんなさいと土下座するべきかもしれない。

そんな寿々にできることと言えば、身の程をわきまえてこの想いを隠し通すことだ。もしかしたら両思いかもしれない、なんてメガトン級の勘違いをかまして告白をするなんてありえない。

その王子様は会社の上司で同じチームに所属しているため、仕事では彼を支えられる立場にある。寿々はそれに感謝して、毎日を地味に過ごしていた。

「ふあ……」

取り留めもないことをつらつらと考えて歩きながら、寿々はあくびを噛み殺した。

昨夜は少し遅くまで資格試験の勉強をしていたせいで睡眠不足気味なのだ。しかも今日は水曜日。週末まで今日を入れてあと三日もあるから、精神的な疲労感が半端ない。

「寿々ちゃん、おはよう。どうした、大きなあくびして」

そんな時、突然うしろから肩を抱くようにぼんと叩かれて、寿々は内心飛び上がった。慌てて横を見ると、そこにいたのはよく見知った人物である。

「せ、芹沢主任……っ!？」

「ははは、そんなに驚かなくてもいいんじゃない?」

寿々の反応に苦笑を漏らした彼は、直属の上司である芹沢主任。寿々が密かに想いを寄せる王

子様”である。今日もセンスのいいスーツをスマートに着こなしていてかつこいいし、穏やかな声が胸をくすぐる。

朝から声を掛けてもらった喜びはありつつも、大あくびを見られてしまった恥はずかしさで頬がかーっと熱くなった。

「どうせまた遅くまで勉強してたんだろ。今度はなに？」

色素の薄い茶色の瞳が優しく覗き込んできて、寿々の頬はどんどん熱を増した。心拍数だって、もしも今、計測器を付けていたら余裕で針が振れ切れているはずだ。

あっさりと夜更かしを見破られた寿々は、しどろもどろに答える。

「あの、えっと……ビジネス実務法務です。契約書のチェックをする時に、法律の知識がもつと必要だと思うことが多くて……」

寿々の仕事は営業事務だが、身に付けなければならぬ知識は無限にある。五年目になっても自分はまだまだだと思ふことばかりで、時間を見つけては毎日自宅でコツコツと勉強していた。

今は、もう少しで開催されるビジネス実務法務の検定試験のために追い込みをかけているところである。

寿々の答えを聞いた芹沢はわずかに眉をひそめた。

「勉強熱心なのは寿々ちゃんのいいところだけど、体を壊したら元も子もないよ。ちゃんと睡眠時間は確保すること。わかった？」

「は、はいっ」

「うん、いい返事」

よしよし、と頭を撫でられて寿々はきゅつと体をすくめる。

芹沢にとつてはただの部下、もしくは近所に住む小学生を褒める程度の意味合いでこういうことをするのだろう。わかつてはいても彼に対して「ただの上司」以上の感情を抱いている寿々には堪たつたものではない。今にも暴れだしそうな心臓に、平常心、平常心、と言いつけられる。

「じゃあ僕はちよつと急ぐから。ごめんね」

「いえっ！ お時間を取らせてすみません」

腕時計をチラリと見た芹沢は、軽く右手を上げて人混みに消えて行った。

その直前、『月曜から言おうと思つてたけど、新しい靴すぐ似合つてる』と彼が言い残したため、寿々の頭は爆発寸前だ。まさか自分が靴を買い換えたことに、気付いてくれているとは思っていなかった。

そうやって朝から寿々の心をかき乱した王子様は、大手総合商社の紙・パルプ部門営業一課に所属する芹沢透とほろ主任である。

少し長めの前髪を横に流していて、そこから覗く優しい瞳は薄茶色。全体的に色素が薄くて透明感があり、まさに正統派王子様といった外見だ。

いつも穏やかな笑顔を絶やさず、誰にでも公平で、彼が声を荒らげた場面は今まで一度も見ただがない。

優しいな雰囲気と甘い顔立ち。そのうえ、驚くほど仕事ができる。野心的な社員が多く、体育会

系の社風の中では異色の存在と言えるだろう。寿々の所属する紙・パルプ部門は芹沢が引つ張っていると言っても過言ではなく、世界各地に広がる人脈を駆使して大きな取引をいくつも成功させている。

そして寿々が最も尊敬しているのは、彼は誰よりも優秀であるにもかかわらず、まったくそれを鼻に掛けないところ。少しくらい天狗になっても誰も責めはしないというのに、決して驕り高ぶらず、慢心しない。いつも謙虚で誠実な人柄によって、上司からも部下からも一目置かれている。つまり彼は、寿々なんて遠く及ばない、雲の上の存在。

この条件で独身、彼女なし、三十歳とくれば社内ファンはたくさんいて、女子社員達はこっそり『芹沢王子』とまで呼んでいる。三ヶ月ほど前に、同じく社内の人気のあった建設機械部門の真山課長が結婚してしまつてからは、さらに人気が高まつたように思う。

だからそんな人に片想いをしているなんて分不相応だと、寿々は十分承知していた。同じチームで彼の仕事を支えられるだけで幸せだと満足しなければならぬ。

地味で平凡な町娘Bは、同じく地味で平凡な青年A辺りとくつつくのがセオリーだ。

そうはわかつていても気持ちばかりはどうにもならず、寿々は絶対に実ることのない恋に身を焦がしていた。

彼が好きで、好きで、本当にどうしようもなく好きで。身の程知らずなのはわかつてはいるけれど、せてこんな気持ちを抱えることだけは許してほしい。

ただ近くにいられるだけで満足するからと、心の中で言い訳をしていた。

2

「おはよ！ どしたの、ニヤニヤしちゃつて？」

「わっ……美波？ おはよう、偶然だね」

芹沢に靴を褒めてもらった幸せを噛み締めながら駅の構内を歩いていると、またしてもうしろから肩を叩かれた。今日はよくうしろから声を掛けられる日だ。

驚いて振り返ると、そこに立っていたのは同期の安藤美波である。彼女とは新入社員研修の際に仲良くなり、それ以来プライベートでも一緒に遊んでいる仲だ。お互い同じ路線を使い、ほぼ同じ時間に通勤しているため、こうして朝に出会うことも多い。

「えへへ、ちよつといいことがあったの！ 今日の予約十九時だよ。その時に話すから、仕事遅くなりすぎないようにしようね」

寿々は美波にっこりと笑いかける。

今日の夜は美波と話題のイタリアンの店に行くことになっているのだ。予約が一月待ちの店で、先月予約してからずっと楽しみにしていた。今日は芹沢に靴を褒めてもらったし、話題のイタリアンにも行けるし、電車を降りた時のブルーな気持ちの嘘のように消えてしまう。

「そういえばね、こないだ女優の大島初音が来店したつてお店のブログに書いてあったの！ 他に

もサツカーの内藤宏選手とか、アイドルの松山流星ケンとか!」

「へえ、そうなんだ」

「すごいでしょ!? もしかしたら今日も誰か来てるかも。どうしよう、サイン色紙とか持って行っちゃおうかなあ」

「ええー、そんなの必要? 美波はミーハーなんだから」

きゃっきやと盛り上がる美波の隣で、芸能人にあまり興味がない寿々は少しだけ呆れ顔になった。そもそも誰か来るのかも確かではないのに、色紙まで持って行くのは大袈裟ではないだろうか。

美波はそんな寿々の反応を不満に思ったらしく、チラツと意味ありげな視線を投げてよこす。

「ま、寿々は芹沢王子一筋だからね。芸能人なんて興味ないのかしら?」

「ちよ、ちよと待って! こんなとこで言わないでよっ!」

美波の爆弾発言に、寿々は大慌てで辺りを見回した。ここは通勤時間の会社最寄駅という危険すぎる場所だ。社内の誰かに聞かれていないかと、冷や汗をかきつつ周囲を確認する。

大勢の人の流れに沿って歩いていた途中だが、幸いにも近くにいる人々はみんな知らない顔ばかりだった。どっと体の緊張が解ける。

「もう! 誰かに聞かれてたらどうするのよ!」

「ごめんごめん。だって寿々があんまりにも冷たいからさあ」

「そんなの言い訳になりませんっ」

「ごめんってば。じゃあ、カルガモ珈琲館でなにかおごるから許してよ」

「う……。……仕方ない。じゃあ、キャラメルラテなら許してあげてもいいけどっ」

「おっけー」

交渉が成立して、寿々はもったいつけながらも機嫌を直すことにした。

仲の良い美波とは、こうしておごったりおごられたりするのもコミュニケーションのうちのひとつだ。

もともと二人が知り合ったのも、新入社員研修で筆記用具を忘れた美波にペンを貸したのがきっかけだった。お礼にとコンビニのシュークリームをもらい、そのまたお礼にと持っていたチョコをおすそ分けしたりしてどんどん仲良くなっていったのである。

だが、大好きなカルガモ珈琲館のキャラメルラテで懐柔されてしまったとはいえ、芹沢についての話題がトッピングシークレットなのは変わらない。

なにしろ彼は、平凡・地味・目立たないの三拍子揃った寿々とは月とスッポン、いや月と消しゴムのカスくらい格が違う相手なのだ。寿々は感情が顔に出やすいらしくて美波にはすぐにバレてしまったが、他の人に想いを悟られるのだけは絶対に避けたい。

駅を出てしばらく歩くと、お目当ての店についた。

寿々お気に入り店のコーヒーチェーン店『カルガモ珈琲館』は、駅と会社のちょうど真ん中に位置している。

イメージキャラクターは、親子のカルガモ。羽に白抜きのハートマークが入っているお母さんカ

ルガモのカルと、三羽の黄色い子ガモ達の大きな看板が店の目印だ。

カップに印刷してある親子のイラストもとても可愛いし、クオリティの高い味のわりにお手頃な値段なので、ついつい手が伸びてしまう。

しかも今は五百円購入ごとにスクラッチカードを配布していて、運が良ければカルと子供達のオリジナルグッズが当たるのだ。

「寿々、スクラッチ集めてるんだよね？ 私はいらなからあげるよ」

「うそ！ 本当!? ありがとーっ！」

商品の受け取りを待っていると、なんと美波がスクラッチカードを譲ってくれた。目指すはA賞の特大ぬいぐるみ、せめてD賞のステッカーをゲットしたいと夢見ている寿々は大喜びだ。いそいそと財布から取り出した硬貨でスクラッチを削る。

「あー、ハズレ？ 期待させちゃってごめんね」

「いいのいいの。ハズレ券十枚で敗者復活賞のタンブラーに応募できるから」

結果は残念だったが、ハズレ券は大事にバッグにしまった。寿々が熱心にスクラッチカードを集めているのは部署の中でも有名なため、あちこちから『これ、よかったら』と渡されてたくさん溜まっているのだ。これだけあれば一つくらいタンブラーが当たるのでは？ と期待も高まる。

ちなみにだが、実は芹沢からも先週スクラッチカードを譲ってもらった。そんなこと予想もしていなかった寿々は舞い上がり、うっかり本人の目の前で『芹沢主任にいただいたものなんてもったいなくて使えません！ 大事に取っておきます！』と言ってしまう、大慌てだった。

幸い冗談と受け取ってもらえたようだが、本当に応募には使わず残しておく予定だ。現在はカードの端に赤いペンでハートマークの目印をつけて財布に入れ、たまに取り出して眺めてはにまにましている。誰にも言えない秘密の幸せタイムだ。

「そういえばさ、芹沢王子の新しい噂聞いた？ なんか中東に油田持つてるらしいよ」
「は？」

キャラメルラテのカップを持って会社へ向かう途中、美波が唐突に言い出した。あまりにも突飛な内容に、寿々は思わず足を止める。さすがにこれはナイ。

社内で大人気の芹沢に関する噂話はたくさんあるが、どれも現実味のない内容ばかりだ。

曰く、実は大手ホテルチェーンの御曹司だとか、総資産は十億円だとか、百億円だとか、欧州某国の王族と縁戚だとか。彼の王子様のルックスとその噂が『芹沢王子』というあだ名の由来である。みんなふざけ半分で噂をしているだけだろうとは思っているが。

「油田？ もう、美波は本当にそんな噂信じてるの？」

「ちよっとーっ！ 今回は確実なんだってば！」

明らかに本気にしていない寿々の表情に、美波がふんふんと怒り出した。

彼女の説明によると、中東で出資する予定の石油関連事業が頓挫しかけた際に、まったく関係ない部署である芹沢の人脈を使って事業継続が決定したことがあったのだとか。その時に実は彼が現地油田を持っていると判明したらしい。

「じゃあ美波は油田の権利書とか見たの？」

「……それは見てないけど。でも今度こそ本当だと思うのよ!」

「それじゃ信じられないなあ」

芹沢の石油王説を熱弁する美波をハイハイとなだめながら、寿々は会社のエントランスへと足を踏み入れる。途端に冷房のきいた快適な空気に包まれて、わずかに汗ばんでいた肌がクールダウンした。

そうやってホッと息をついたその一瞬後、寿々の心拍数はふたたび急上昇する。なんと、ちょうど会社から出て行くとうとしていた芹沢にまた鉢合わせしたのだ。

「芹沢主任! 今から外出ですか?」

しかも、ばちりと目が合ってしまう。こんな些細な偶然にも胸が弾んだ。今日はなんて運のいい日なんだろう。

「うん、大宮でアポが九時半からなんだ。帰りは昼前かな」

受付の正面に掲げられている大きな時計を見ると、時刻は八時三十五分。

九時より前に出発せねばならない場合は自宅からの直行が許可されているが、必ず会社に顔を出してから出掛けるのが芹沢だ。そんなところが彼の真面目な人柄を表していると思う。

お気を付けて、と頭を下げると、芹沢は嬉しそうに目を細めた。

「そう言ってもらえるとやる気が出るんだよね。寿々ちゃんに会いたくて一旦出社したけど、やっぱり来てよかった」

「……………え?」

「はは、冗談だよ。じゃあ、いつてきます」

「……………つ、もう! からかわないでくださいっ!」

顔を真っ赤にして叫ぶ寿々に手を振って、芹沢は足早に自動ドアから出て行く。やっぱり主任はうるさくもかっこいいなあ、などと見惚れながらスラリとした長身を目に焼き付けていると、隣に立っていた美波に肘で小突かれた。

「なに、朝からイチャついちゃって」

「な……………つ、イチャついてなんかないよ! ちょっとからかわれただけでもん」

「またまたあ。どう見たって相思相愛の恋人同士みたいだったよ。だいたい、ちゃん、付けて呼ばれてるの寿々だけじゃん」

「その理由は美波だって知ってるでしょ!？」

相思相愛だの恋人同士だの、自分と芹沢を表す関係からは最も遠い言葉に寿々は憤慨する。そんな誤解をするなんて彼に失礼だ。

自分だけ特別に「寿々ちゃん」と呼ばれているのは、入社当時、同じ部署にもう一人高野姓の社員がいたからである。簡単な話し合いの結果、基本的にはどちらも「高野さん」と呼ばれることになったが、彼だけは違った。

『高野さんには僕のサポートをフルでお願いすることになると思う。頻繁に呼ぶのに同じ呼び方だと紛らわしいから、僕は「寿々ちゃん」って呼ぶね』

当時まだ主任という肩書きのなかった彼は、みんながいる前でこやかに告げたのだ。あまりに

もさざりと言うものだから、寿々も流されて頷いてしまった。あとで冷静に考えて初めてその重大性に気が付き慌てたが、逆に自分を女として意識していない証拠だろうという結論に達した。

「はいはい、そういうところがイチャついてるっていうの」

「だから違うってば」

満員のエレベーターの中、最後まで小声で言い合いをしてから美波は降りて行った。資源・エンルギー部門の美波は五階、紙・パルプ部門の寿々は六階で働いている。もし時間が合えばお昼も一緒にしようと約束したので、今日の仕事はサクサク片付けるぞ！と寿々は気合いを入れ直した。

3

『ごめん！ この埋め合わせは絶対にするからーっ！』

その電話がかかってきたのは昼休みに入ってからすぐのことだった。

今からどこかに食べに行かないかと美波に連絡しようとした瞬間、手に取ったスマホがちょうど震え始めたのだ。画面に表示されている発信者名はまさに今電話を掛けようと思っていた相手で、あまりのタイミングのよさに笑ってしまった。

半分笑ったまま受話のボタンを押したのだが、それは残念ながら夜のイタリアンをキャンセルしたいという申し出だった。

「そんなに謝らなくていいって。駿ちゃんと会うの久しぶりなんでしょ？」

『そうだけど……』

現在話題の駿ちゃんは、南米に長期駐在中の美波の彼氏である。元々は同じ会社で働いていたのだが、今は子会社に出向している。現地で新規事業の立ち上げに携わっており、多忙を極めているため滅多に帰国しない。それを美波が寂しがつているのを寿々はよく知っていた。

そんな彼が本社での報告会のためにひよっこり帰って来たそう、美波は今晚駿ちゃんと過ごしたいと言ってきたのだ。もちろん寿々の答えは決まっている。

「私はいつでも美波に会えるんだから大丈夫だよ！ あ、でも今度からはちゃんと帰国する前に連絡してって言っておいてね」

『言う！ 絶対言うっておく！』

「そうだ、せっかく予約してるんだからイタリアンも駿ちゃんも行つて来なよ。今度どんなだったか教えて」

『いいの!? 寿々ゝありがとっ』

今にも土下座しそうな雰囲気伝わってくる電話を終えて、寿々はこっそりと肩を落とした。

一ヶ月も前から予約していたイタリアンだが仕方ない。滅多に会えない恋人が帰国したのだから美波を笑顔で送り出してあげるべきだろう。

だが楽しみにしていた予定が潰れて残念なのも事実だ。そういえば昼食に誘うのを忘れていたが、これも駿ちゃんと食べるのだろうかと思直した。

「あの、寿々先輩」

その時、隣の席からトントンと肩を叩かれた。遠慮がちに声を掛けてきたのは、くるんとカールしたまつ毛と大きな瞳が印象的な後輩・今井リナである。新入社員の彼女は、今月全体研修を終えて、紙・パルプ部門の営業課に配属されたばかりだ。

「もしかして今日、人気のイタリアンに行くって話、なくなっただんですか？」

「うん、一緒に行く予定だった子の都合が急に悪くなっちゃって。……ところで何度も言うようだけど、会社は学校じゃないから“先輩”はやめてね？」

「あつ、すみません！ いつも忘れちゃうんです」

会社にもよると思うが、寿々の働く会社では基本的に“先輩”と呼ぶのはNGだ。いつも注意している内容を優しく繰り返し返すと、まだ学生気分が抜けない彼女は、てへ、と首をかしげた。

普通の間がやればどつきたくなるようなぶりっこ仕事だが、リナには意外と似合ってしまうから恐ろしい。

彼女の明るい栗色のロングヘアは毎日綺麗に巻かれ、よく手入れされた爪にはベビーピンクをベースにしたフレンチネイルが施されている。人懐っこい笑顔がチャームポイントのリナは、はっきり言ってもかなりの美人だ。

なんだかファッション誌から抜け出したような容姿だと思っていたら、学生時代は実際に読者モデルをしていたらしい。しかも実家は会社経営をしている資産家という噂だ。

そんなゆるふわお嬢様なりナは早くも職場の結婚したい女の子ナンバーワンに躍り出たようで、

「あちこちの男性社員からリナちゃんリナちゃんともてはやされ、合コンに誘われている。その一方、仕事は壊滅的にできないため指導係の寿々は毎日四苦八苦しているところだ。「すごく楽しみにしてたのに残念ですね。先輩、よかつたらこのチョコ食べて元気出してくださいー！」

「だから、先輩って言わないの」

「あつ」

この一ヶ月で百回は繰り返し返した注意にげんなりしつつ、リナの言葉に甘えて個包装されたチョコレートを受け取った。

フリーズドライされたイチゴをホワイトチョコでコーティングしたそれは、イチゴの酸味とチョコレートの甘さが絶妙にマッチしていくつでも食べたくなる味だった。とてもおいしいとお礼を言うと、彼女はものすごく喜んでくれる。

「よかつたあ！ 先輩ってよくイチゴ味のお菓子食べてますよね。だから今朝コンビニで見つけて、寿々先輩が好きそうだなって思っ買って買ったんです。もつと食べていいですよっ」

「……あ、ありがとう」

屈託のない笑顔を向けられて、寿々は少しだけ怯んだ。美人でぶりっこキャラの彼女は、普通なら同性からはやつかみを受けて孤立しそうなものだ。それがあつという間に職場のお局様からも気に入られてしまったのは、多分こういう誰にでもフレンドリーな性格が理由だろう。

いつも口うるさい寿々の注意も素直に聞き、こうして純粹に慕ってくれる。

仕事ができない以外はまったく欠点のないリナだが、正直なところ寿々は彼女が少々苦手だった。いつも元気で可愛いリナはキラキラしていて、地味な寿々には眩しすぎるからである。それに寿々が彼女を苦手としているのには、もう一つ理由があった。

「あーっ、芹沢主任！ お疲れ様ですっ」

寿々と話していたはずのリナは、ちょうど外出から帰って来た芹沢に気付くとすぐそちらに飛んで行った。あまりにもわかりやすい態度に、寿々からは苦笑しか漏れない。

「お疲れ。外出中、なにか僕に連絡はあった？」

「はい！ 全部メモしてデスクに置いてあります！」

ビジネスバッグを置いた芹沢がメモを手にとると、リナは真横に立ってキラキラした瞳で見つめる。まさに恋する乙女といった様子だ。誰もが認める王子様の芹沢と、日向に咲くひまわりのような彼女。二人が並んでいると本当に絵になると思うのに、そんな姿を目の当たりにすると寿々の胸はチクチクと痛んだ。

芹沢と深い関係になりたいなんて大それた夢は持っていないけれど、やはり誰かと寄り添っている場面を直視するのはつらい。

「うん、ちゃんと書けてるね。最初はどうかと思っただけど、少なくとも電話対応はできるようになってよかったよ」

「えへへ、寿々先輩の教え方が上手なんです。これからは任せてくださいね！」

硬い表情でメモをチェックしていた芹沢が表情を緩めると、リナは得意げに胸を張った。

正直この程度の仕事は一日で覚えてほしいのだが、相手の名前を聞き忘れるなどのうっかりミスばかりだった最初の頃に比べると断然マシになっている。寿々は悪夢のような指導の日々を思い出し、心の中で自分を褒めた。

「それより主任、今度おすすめの居酒屋に連れて行ってくれるって約束覚えてますか？ 私、ずっと予定を空けて待ってるんです。電話対応が完璧になったご褒美に今日こそ連れて行ってもらえませんか？」

「ちよ、ちよっと今井さん!？」

リナの怖いもの知らずなおねだりに、先輩と呼んではいけないと注意するのも忘れて止めに入った。ここまでグイグイ攻める勇氣は尊敬するが、さすがにやりすぎである。それとも今時の若い子はこのくらい普通なんだろうか。芹沢が気分を害していたらどうしようと思不安になる。

慌てふためく寿々をよそに、芹沢はなんとにっこりと微笑んで頷いた。

「仕方ないな。その代わり予約は君が取ること。そうだな……僕が行けるのは二十時くらいかな」

「…………え」

やったー！ と無邪気に喜ぶリナの前に、寿々は愕然としてその場に立ち尽くした。これはつまり、二人がデートの約束を取り付ける場面に遭遇してしまったということだろうか。

店名を書いたメモを受け取ったリナは、席に戻り、早速パソコンで電話番号や場所を調べ始めている。

彼とは釣り合わないからと最初から諦めていた寿々と違い、積極的なリナと芹沢の距離はどんどん縮まっている。芹沢だって悪い気はしていないらしい。もしかしたら今晚、二人は恋人同士になるのかもしれないと思うと、寿々はこの世の終わりのような気分だった。

「じゃ、寿々先輩もそれでいいですよね？」

「……………へ？」

そんな時に突然話を振られ、悲劇のヒロイン気分浸っていた寿々は最初なにを言われているのかわからなかった。ぽかんと見つめ返すと、リナが「もうっ！」と怒る。

「ちゃんと聞いてました？ 主任のおすすめの居酒屋に行こうって話です！」

「え？ えっと、でも……今日は二人きりのデートなんじゃ……」

まさかこの状況で自分も誘われるとは露ほども思っていなかったため、寿々はしどろもどろになっってしまう。お似合いの二人の間に割り込むなんて、明らかにお邪魔虫だ。この誘いを本気にしているのだろうか。

どう返事をするか迷っていると、リナが寿々の手をぎゅっと握ってぶんぶん振る。

「先輩も一緒に決まってるじゃないですか！ だって今日の予定なくなっただんですよね。あつ、よかつたらみなさんも一緒に行きませんかー？」

「え？ ちよっと」

まさか予定がなくなった自分に気を遣ってくれたのだろうか。呆気にとられているうちに、リナはどんどん声を掛けていく。

結局集まったのはチームを越え、総勢十八人。芹沢が合流するのは二十時だが、とりあえず都合のつく者だけで早めに始めるらしい。幹事はリナで、発端の芹沢と飲みニケーションが大好きな田端課長がメインの財布係だそうだ。

「課長、今日のご馳走様です！ 全力でいきます！」

「こちら、お前どんだけ飲むつもりなんだよ。ちよっとは遠慮しろ」

わいわいと盛り上がる輪の中心で、リナは楽しそうに笑っている。寿々はそんな様子を眺めながら、彼女は本当にこれでいいのだろうかと一人悶々としていた。

職場の先輩がへこんでいたからって、せっかく芹沢と二人きりになる機会をふいにしてしまってもしも自分にそんなチャンスが巡ってきたら芹沢を独り占めしてしまいうような寿々は、なんとなく負けた気分だ。

そうやってリナへの小さな劣等感に苛まれていると、人だからから離れたところで寿々の名前を呼ぶ者がいた。芹沢である。

途端に嬉しくなつてパタパタと駆け寄った自分は、とても現金な性格だと思う。

「主任！ 今から打ち合わせですか？」

「そう。また午後には出るから、弁当食べながらね」

そう言う芹沢の片手にはラップトップパソコンと分厚い資料、もう片手には白いビニール袋が提げられている。予定が詰まっている日は昼食も打ち合わせをしながらというのも珍しくないのだ。

お疲れ様です、と心から労りの言葉を掛けると、彼は辺りを見回してから一歩こちらに体を寄せ

た。彼のまつ毛の一本一本まで数えられそうな距離に、寿々は内心慌てふためく。

「今日、寿々ちゃんも来るんでしょ。最初から？」

「え……と、はい。そう、です」

あ、顎の下に小さなほくろがあるんだ、なんて思っていると反応が遅れてしまった。内緒話をするような芹沢に、どうしようもなく胸がドキドキする。体が近い。

「そっか。その店、卸業者と直接契約してるから、海産物が全部安くて新鮮で美味いんだ」

「……そうなんですね。すごく、……楽しみです」

もっと気の利いた返事をしたいのに、胸のドキドキで頭がパンク状態の寿々は、ありきたりな言葉しか思いつかなかった。平静を装って会話を続けると、芹沢が優しげに目を細める。

「寿々ちゃんにも一度食べさせてあげたかったからいい機会だったよ。よかったら今度は、二人きりで行こう」

「え……？」

「これは冗談じゃないから。じゃ、またあとでね」

「……………っ!!」

予想外の言葉に目を大きく見開く。ちっぼけな劣等感なんて、簡単に吹き飛んでしまうような衝撃だった。

4

午後は時間が矢のように過ぎていった。リナにはやるべき仕事の指示を出し、自分は芹沢の言葉を思い出して赤くなったり青くなったりしながら山積みの業務を片付けていく。

——彼はどういうつもりで、あの言葉を掛けてくれたのだろう。二人きりということ、まさかデートのお誘いなんだろうか。だが誰にでも優しい芹沢にとって、『二人きり』という言葉に大した意味はないのかもしれない。違っていた時に悲しくなるから、期待しては駄目だ。

一生懸命そう思い込もうとしたが、でももしかしたら、という可能性に口角が上がるのを止められない。

誰もが憧れる王子様の隣に立っている自分を初めて想像して、寿々は一人でむふふと笑った。よし、今日は念入りに化粧直しをしよう。

こんなことならもっと可愛い服で来ればよかった。準備の時間も含めて飲み会開始の四十五分前にはオフィスを出たいから、早めに自分の仕事を終わらせ、それからリナの仕事のチェックをしようとする段をつける。

そして時刻になり、当然仕事は仕上がっているものとしてリナの分のチェックを始めたのだが——

芹沢の言葉に舞い上がり、ずっと浮かれ気分だったからバチが当たったのかもしれない。リナが自信满满で差し出した仕事は散々な出来だったのだ。

「今井さん……これ、昨日教えたはずよね？」

「えっ、うそ、間違ってますか？」

信じられないことに、全部間違っている。

今回頼んだのは、出張経費の精算と明日の会議で使う資料の準備だ。

総合商社の営業という仕事柄、国内・海外問わず出張経費の申請は非常に多い。営業から申請された経費をデータ入力し、経路と領収書、本人が所持している通勤定期を照らし合わせて最終チェックをするのが事務の仕事。しかし、申請分を打ち込んだだけで、最終チェックが終わっていないのだ。

さらに会議の資料もサイズが間違っている。

「ど、どうしようっ！」

おろおろするリナの横で、寿々は頭を抱えた。

自分の仕事を早く終わらせることに集中するあまり、リナへの気配りを忘れてしまった。それはこちらの落ち度だ。最後にまとめて確認するのではなく、もっと早い段階で見しておくべきだった。降って湧いたような幸運に浮かれて、初歩的なミスをしてしまったのである。

尻拭いは自分でしなければいけない。

「あとは私がやるから、今井さんは行って。今日は幹事でしょ？」

「そんなっ、私のせいなのに……！」

自分だけ遊びには行けないと訴えるリナに、寿々は静かに首を横に振る。

「今井さんはまだ新人なのに、ちゃんと確認しなかった私が悪いの。あとで合流するから、ね？」
配属から一ヶ月経っていないリナはまだ研修中で、残業時間の管理も指導係である寿々の仕事となっている。研修中はほぼ残業をさせない決まりになっているため、これ以上残すことはできない。

職場の親睦を深めるための幹事役も仕事のうちだからと言いくるめて彼女を退社させ、寿々は追加の仕事に取り掛かった。

「で、できた……っ！」

すべての処理が終わったのは、時計の針が二十時を大きく回った頃だった。

すでに課内に人はいない。取引先に向いて仕事をしている者もいるのだろうが、ほとんどが飲み会に参加しているからだ。この時間なら、芹沢ももうとくに飲み始めているだろう。多分今から出掛けても、到着する頃には宴も終盤である。

「仕方ない、帰ろ……」

寿々はパソコンをシャットダウンして、凝り固まった肩をぐるぐると回した。明日も普通に会社はあることだし無理はよくない。中途半端に参加するより大人しく帰宅することにしたのだ。幹事のリナにはその旨を連絡したが、盛り上がっているのか返事はまだ来ていない。

「あーあ、主任のおすすめのお店、行きたかったなあ」

デスクを片付けてバッグを持った寿々は、エレベーターホールへ歩きながら大きく肩を落とした。本当なら今頃、おいしい海鮮に舌鼓を打っているはずだったのに、どうやら夕食はコンビニのパンかおにぎりになりそうだった。

飲み会の間、遠くに座っている芹沢の秀麗な横顔を眺めるといつもの楽しみもおじゃんになってしまう。彼の姿をじっくり堪能できる、数少ないチャンスだったのに。

そういえば今日は行けなくなったが、今度二人きりで連れて行ってもらえるという約束はまだ有効なのだろうか。もし本当に誘ってもらえたら、美波に付き合ってもらって新しい服を買いに行こう。

よし決めた、と拳を握り締めた寿々は、エレベーターホールに入る直前で、はっとして息を止めた。

向かっている先から、なぜか自分の名前が聞こえてきたからである。

「なんだ。お前、まだ『寿々ちゃん』のストロー集めてたのか」

びたり、と足を止めた寿々は、思わず壁に張り付いて身を隠す。声の主は角を曲がった先にいるようだ。マイルカーペットが足音を吸収してくれていたもので、気付かれてはいないだろう。

聞こえてきた言葉は日本語のはずなのに、いまいち文章の意味がわからなかった。寿々は一人で首をかしげる。

ストローを集めるって、一体どういう意味だろう。なにかの比喩なんだろうか。

「……っていうか、誰？」

自分を愛称で呼んだその声に心当たりがなくて、寿々は壁からそうっと顔だけ出してみる。

すると、そこにいたのは建設機械部門営業二課の真山課長。

自分とはなんの接点もない、ハイスペックイケメンの出世頭である。真山とはろくに会話をしたこともないから、まさか名前を覚えてるなんて思っていなかった。

寿々の疑問は深まるが、その向こうに立っている人物を見て、さらに謎は増した。

なんと、今は飲み会に参加しているはずの芹沢が、エレベーターホールに設置されているゴミ箱の隣に佇んでいたのだ。

どうして？ と口の中で呟く。そんな寿々を置いてきぼりにして、二人の会話は続く。

「僕の大事な寿々ちゃんを勝手に名前で呼ばないでもらえますか。課長でも殺しますよ」

「おいおい、名前を呼ぶだけでもだめなのかよ。お前の溺愛っぷりは、やばいな」

芹沢の物騒な返答に、真山が小さく肩を揺らして苦笑いした。

いつも通りの柔らかな笑顔なのに目がまったく笑っていない芹沢と、それにまったく動じず面白そうにしている真山。対照的な二人の様子を、寿々は壁に隠れてぼかんと見つめるだけだ。

「……………どうということ？」

一体、なにがどうなっているのかさっぱりわからない。自意識過剰かもしれないが、この会話だけ聞いていると、芹沢が自分に好意を抱いているように受け取れてしまう。

それに寿々が驚いたのはそれだけではなかった。まさに今、芹沢がその美しい手をメタリックなゴミ箱に突っ込み、捨てられていたジュースの空きパックを取り出したのだ。

ここでふたたび『ストローを集めている』という言葉を出した寿々は、それがなにかの比喩ではなく言葉通りの意味だったと気付いて愕然とする。

「え、主任が持つてるのつてもしかして……」

その空きパックには大いに見覚えがあった。凜とした美形の芹沢には似つかわしくないラブリーナピンクの空きパックには、ポップな赤い書体で『イチゴみるく』とある。ついさつき、寿々が捨てたものだ。

実は仕事もう少しで片付くかという頃、どうしても甘いものが飲みたくなつてエレベーターホールの自動販売機を利用した。観葉植物で区切られた簡単な休憩コーナーでそれを飲み干したのは今から約三十分前。

今日はゴミ箱がほぼ満杯で、ゴミの一番上に空きパックを捨ててからオフィスに戻ったと記憶している。

だから、あれは寿々が飲んだイチゴみるくでほぼ間違いはない、のだが。

——これまでの情報を整理すると、誰もが憧れる芹沢王子は平々凡々な寿々に好意を抱き、その結果寿々の使用済みストローを収集している、という非現実的な仮定が成立してしまう。

「そんな、でも……まさか……」

普通なら信じられない話だが、空きパックから大事そうにストローを引き抜く芹沢を目の当たりにしては、信憑性がかりが増していった。

「いけませんか？ 何年も掛けて少しずつ信頼を得てきました。最近やっと、冗談交じりに好

きだつて言っても怖がられないようになったのに、今さら横から掠め取られたんじゃ堪りませんから」

「ちよつと待て、一応言っておくが、俺は結婚したばかりだからな。全然狙ってないぞ」

「寿々ちゃんは可愛いので、たとえ妻帯者でも安心はできません」

「……………」

交わされる会話には戸惑いしかないが、寿々はふと、ある一つの疑問を持った。

三十分前に空きパックを捨てた時、その場に芹沢はいなかった。だからあれが寿々の捨てたものだとは知らないはずなのに、一体どうやって特定したのだろうか。

不思議に思っている、どうやら真山も同じ疑問に辿り着いたらしかった。

「ところでそれは本当に……高野が捨てたものなのか？ 誰か別人のものかもしれないだろ」

「寿々ちゃん」と言おうとして芹沢に睨まれ、名字に言い直したあとに告げられた真山の主張に、寿々は大きく頷く。実際には自分のもので間違いはないのだが、知らないはずのを知っている芹沢はエスパーとしか思えなかった。

こっそり聞き耳を立てている寿々のもとに、彼の不服そうな声が届く。

「課長、僕が寿々ちゃんのストローを間違えるとも思ってるんですか？ ここに少しついているピンクアブリコットの口紅は去年の九月二日から彼女が愛用しているものです。たまにローズベージュの時もありますが、基本はこれですね。それからここ、先端から八ミリのところを噛んだ跡がありますよね。これも寿々ちゃんの癖なので」

「……………」

「ちなみに四角の紙バックを捨てる時は潰していただきますが、円筒形のプラカップを捨てる時には潰しません。一瞬潰そうか迷ってから、でもそうするとカップと蓋がバラバラになってしまおうし……と迷ってやめるところを見かけた時には、あまりの可愛さに胸が苦しくなりました」

「お、おう……」

真山は引いたように黙り込んだ。寿々も色んな部分にドン引きする。

「はあ……、選んだのがイチゴみるくっていうところもいいですよ。健気で、可憐で、努力家な彼女によく似合ってます。あ、寿々ちゃんのストローの見分け方は教えましたが、課長が勝手に持って行ったら許しませんよ？」

「んなもんいらねーよ！」

真山の悲鳴のようなツツコミに同意しているうちに、だんだん頭が痛くなってきた。

芹沢は恍惚とした表情で寿々が可愛い美しいと語り続けているが、自分の外見はごくごく平均的である。例えばイチゴみるくが似合う女子がいるとしたらゆるふわ美人のリナのほうで、寿々をイメージする飲料はウーロン茶か玄米茶あたりだ。自分のどの辺がイチゴみるくなのかさっぱりわからない。

だがしかし、今は自分に似合う飲料について考えている場合ではない。芹沢がストローを集めていることのほうが重大案件だ。

「いくら好きな相手でも、使用済みストローをコレクションするなんて気持ち悪いからやめるべき

じゃないか？ ちよつと異常だぞ」
本当にその通りだ。先ほどから真山とは非常に気が合っていて、一方的な親近感すら抱き始めている。この意味不明な事態を打開するには、常識人の彼だけが頼りだった。
「課長、僕をストローフェチの変態みたいに言わないでください」
アイロンの利いたストライプブルーのハンカチでストローを包んだ芹沢が、不満げに眉をひそめる。そのハンカチは大事そうにポケットにしまわれた。
「僕は別にストローが好きなのはありませんから。寿々ちゃんが啜えたものなら、歯ブラシでもスプーンでもリコーダーでも大歓迎ですよ」

「おい、どつちにしろ変態だろ」
もはや夫婦漫才のような会話だった。
壁に張り付いて盗み聞きをしていた寿々は、一人でプルプルと震える。誰にでも優しく、穏やかで、真面目で、いつも微笑みを絶やさない王子様のイメージがガラガラと崩れていく。いくら好きだからって、他人の使用済みストローを集めているなんて気持ち悪すぎではないか。
本当なら、雲の上の存在である芹沢が平凡な寿々に好意を抱いていたという事実には驚くべきなんだと思う。

だが彼の知られざる本性のインパクトが強すぎて、そんなことは些細な問題と化していた。
「お前、本人にバレたらどうするんだ。絶対うまくいかないだろ」

「そうですね、その時は監禁でもしますよ。実はいい檻になりそうなマンションを買ったんです」

「監禁!?　ったく、いつか捕まりそうで怖いな」

「警察関係にもそれなりの伝手があるので、ご心配には及びませんよ。課長は好きな女の子を自分だけのものにして、彼女の目に映るものも自分だけにしたいと思ったことはないんですか?」

「ねえよ」

寿々は決意した。とりあえず逃げよう、と。

立ちほだかる壁の向こうでは、恐怖でしかない会話が繰り広げられている。

監禁、ダメ。ゼツタイ。

もしかしてこれは、俗に言うヤンデレというやつなのだろうか。ごく普通の人生を望んでいる寿々は監禁などまっぴら御免だし、ストローを集める変態と恋人になるのも次の道だ。

じりじりと後退を始めた寿々は、必死に逃亡計画を練る。このまま静かにうしろに下がり、エレベーターホールと反対側にある階段を使って一階に降りれば芹沢に気付かれずに自宅に帰れるはずだ。

明日からは少しずつ接触を控えてフェードアウトして、部署の異動希望も出し、ジュースの空きパックは女子トイレのゴミ箱に捨てることにしよう。これで完璧である。

しかし自分の計画を自画自賛した寿々は、そういう小さな慢心が大きな失敗に繋がるのだと身をもって知ることになった。

一步、また一步と着実に足を下げていた、次の瞬間——履き始めて三日目の慣れない高いヒールのため、寿々は派手にすっ転んでしまったのだった。

5

「……………いつ!!…!!」

かなり間抜けな姿勢で尻餅をついた寿々は慌てて口を塞いだ。

かろうじて悲鳴は上げなかったが、鈍い音を立ててバッグの中身が床に散らばる。財布にスマホと化粧ポーチとのど飴、それから手帳にポケットティッシュにミニタオルにその他諸々。

必要かもしれないものは全部カバンに詰め込んでしまう自分を呪いたくなった。

当然この状況で気付かれずに済むはずもなく、会話が弾んでいたはずのエレベーターホールは急に無音になっている。絶体絶命だ。

どうやったたらこの失態をリカバーできるだろう。一応悲鳴を上げずに済んだため、ここにいるのが自分だとバレている可能性は低い。

ということとは、今から急いで荷物をかき集めて階段から逃げれば、かろうじて間に合うのではないだろうか。そうと決まれば善は急げと、まずは鍵の束を手を取った時だった。

「……………寿々ちゃん?」

「ひゃっ!!」

なぜバレた……………!

キーホルダー代わりに結びつけていた金の鈴がチリンと可愛い音を立てた途端、間髪容れずに確
信めいた声が投げかけられたのだ。

まさか、鈴の音だけで特定したとでもいうのか。

カーペットを踏みしめる忙しい足音が聞こえた後、心配そうな表情の芹沢が壁の角から現れる。
「寿々ちゃん、どうしてそんなところで転んでるの？ ケガはない？」

いつも通りの爽やかな王子様然とした彼が、床に膝をついて優しく手を差し出してくれた。

他人の使用済みストローを集めている変態だなんて微塵も感じさせないキラキラ感に、もしかして今まで聞いたことはすべて幻聴だったのでは、と錯覚すらする。

「あ、大丈夫……」

うっかり芹沢の手を取りそうになった寿々だったが、いや待て、この手を取れば、『いい檻にな
りそうなマンションで監禁』の未来がお得なセットメニューになってついてくる！ と気が付く。
慌ててその手を振り払った。

「だ、大丈夫です！ すみません、すぐに片付けるのでっ」

パシンと乾いた音がして、芹沢はハッとしたように表情を凍りつかせる。せっかく差し出した手
が振り払われて、しかもその相手が好きを持っている異性ならば傷付くのは当然だろう。

その表情がなんだか捨てられた子犬のようにも見え、寿々も引き絞られるような胸の痛みを感じ
た。もしも自分が反対の立場だったら、家に帰ってからさめざめと泣いているところだ。

でも、今のは自分が悪い訳ではない。ストローを集めている彼が悪いのだ。

そんな風に自分に言い訳をして、寿々は辺りに散らばった荷物を急いでかき集めた。整理もしな
いで無理やりバッグに詰め込み、震える足で立ち上がる。

「寿々ちゃん、足捻ってない？ 医務室はもう閉まつてるけど、心配だから家まで送……」

「いえ、本当に大丈夫ですから！ お疲れ様でした！ 失礼しますっ」

「寿々ちゃんっ！」

芹沢の言葉に被せるように挨拶をして、寿々は脇目も振らずに逃げ出した。目指すは階段。普段
はエレベーターしか使わないが、フロアの端にはきちんと階段もある。

高いヒールのパンプスは非常に走りにくいのが、今はそんなことを構っている場合ではない。

自宅まで送ってもらうなんて絶対に駄目だ。もしついて来られたら、歯ブラシもスプーンも、最
悪の場合フォークや箸も根こそぎ持って行かれてしまうかもしれない。明日から食事に困る。さっ
き芹沢の言葉に出てきた中で、小学校で使ったリコーダーだけはすでに手元がないのが救いだっ
た。寿々はすぐに階段室の入り口に辿り着き、重いスチールの扉を開けて中に滑り込んだ。うしろか
ら芹沢の声が聞こえた気がしたが振り返らない。ただ前だけを見て一気に駆け下りる。

右手を手すりに添えて、左手では肩に掛けたバッグを押さえて。吹き抜けになっている階段には
ヒールの音が響き渡った。

そして六階から五階へと続く踊り場に、寿々の足がついた時だ。これまでのスピードを利用して
ぐるんと方向転換しようとしていた寿々は、突然背後から何者かに抱きつかれた。

「きゃ……っ！」

虚を衝かれてバッグを取り落とすとさらにきつく抱き締められ、こめかみの辺りを荒い息が掠める。

「寿々ちゃん、待って」

呼吸の乱れた声で絞り出すように告げたのは、寿々が振り切ったはずの人。芹沢主任だ。ふたたびバッグの中身が零れ、いくつか階段を転がり落ちる音がした。

「や……っ！ 放してください、私もう帰るんですっ！」

じたばたと暴れると、逃がさないとしても言うかのように腕の力を強くされる。

「放さない。今放したら、もう僕とは二度と口を利用してくれなくなるよね」

「そんな、ことは……っ」

咄嗟に反応できずに口ごもった。明日以降フェードアウトしようと思っていたのを簡単に言い当てられたせいでもあるし、彼の口調があまりにも苦しそうだっただからでもある。そんな声を出さずなんて反則だ。自分が彼をいじめているような気分になってしまふ。

「寿々ちゃん……」

また切なげな声で名前を呼んで、覚悟を決めたらしい芹沢は大きな息を吐いた。

「さっきの話、聞いてたんだよね？ どこから聞いてた？ マンションの話だけ？ それとも、ストローのところから？」

逃げ場のない直球の質問に、一体なんと答えるのが正解なのだろうと困り果ててしまふ。なにも聞いていませんと言うべきか、すべて聞いていましたと言うべきか。

しかし彼の鼓動が聞こえるほどのゼロ距離で、寿々には上手にはぐらかす話術も、舌先三寸でこまかす度胸もない。少しだけためらってから、観念して白状した。

「ぜんぶ、です。私のストロー集めてるって、本当ですか？」

「……………うん」

夜のオフィス、二人きりの階段。そこに訪れる長い沈黙。

背後からきつく抱き締められているというロマンティックなシチュエーションにもかかわらず、現在の話題は寿々が捨てて芹沢が拾っていたストローについてである。

あまりにも異次元な現状に、遠い目になった。

「ごめん。謝って済む問題じゃないかもしれないけど、でも少しだけ話を聞いてくれないかな」

「……………」

寿々が俯いて答えないしていると、彼は許可を得たと判断したらしい。大きく息を吸い込み、ゆっくりと語り始めた。

「寿々ちゃんのこと、ずっと好きだったんだ。愛してる。こんな風に誰かを大切に想ったのなんて、生まれて初めてだった」

「……………」

なんの飾り気もない真っ直ぐな愛の言葉に思わず動揺する。年齢 || 彼氏いない歴である寿々にとって、こんな風に求められるのは初めてなのだ。

しかもその言葉をくれたのは、寿々が長らく片想いをしていた相手。気持ち悪い趣味を知って逃

げ出したものの、そんなに簡単に感情を切り替えられる訳もなく……まだ心の片隅で燻っていた恋心がガクガクと揺すぶられる。

「本当に、好きで好きで堪らなかつたんだ。だから、寿々ちゃんが啜えたストローを舐めたい欲求が抑えきれなかつた。寿々ちゃんが捨てた直後のゴミ箱を漁ってみたり、残業してる時にわざとジュースを差し入れて、飲んだあとのゴミは代わりに捨てておいてあげるよって預かってみたり……。それは反省してる。でもこの気持ちだけは本物なんだ」

「主任……」

そこかしこに危険な内容があつたが、とりあえず真剣な気持ちは伝わってきた。言われてみれば確かに、残業中飲み物をもらうことがよくあつた。そんな優しいところも含めて好きだつたのだが、その裏では信じられない陰謀が渦巻いていたらしい。

ずっと芹沢の腕に閉じ込められている寿々は、今更ながらこの体勢が恥ずかしくなってきた。体温も、吐息も、近すぎてどうしたらいいかわからない。

「寿々ちゃん……信じてほしい」

「あ、あの……私……」

そうやって彼の匂いに包まれているうちに、揺れていた天秤は少しずつ芹沢のほうに傾き始めた。

——誰にだつて間違いや欠点はあるのだ。自分自身も完全無欠な聖人君子ではない。四年間見えてきた芹沢のたくさんの長所は、たった一つの短所で帳消しになるようなものだっただろうか。だからストローさえ捨ててくれれば別にいいかな……と妥協案が浮かんだところで、芹沢が唐突にある

宣言をした。

「こんなのでは贖罪にならないかもしれないけど、今まで集めていたストローはすぐに捨てるよ」

「え、いいんですか？」

あまりの呆気なさに、正直ちよつと驚いた。

今までの彼の様子を見ると、絶対に捨てたくないとゴネられるかと思っていたのだ。

「うん。実はガムの包み紙と書き損じのメモと、寿々ちゃんが書類につけてくれてた付箋とインクが切れて捨てていた。ペンも保管してたんだけど、それも全部捨てる」

「そんなものまであるんですか！」

「ああ、寿々ちゃんが旅行のお土産ですつて配ってくれたチョコの袋も捨てないよね。そうだ、割り箸の空き袋もあつたな……」

全部ゴミである。よくもまあそこまで集めたものだと、一周回って感心してしまった。寿々だつて芹沢への片想いは長いが、さすがにゴミまで集めようと思つたことはない。

完全に呆れ返っていると、芹沢が悲しそうに顔を伏せる。

「ごめん……こんなの気持ち悪いよね」

「い、いえそんな」

本当は普通に気持ち悪かつたが、それは言わないでおく。社交辞令というやつだ。

それにゴミまで集めたくなくなるほど愛されていたのだと考えれば、その気持ちもある意味では嬉しい——いつかはそう思えるかもしれない。

「いいんだ。僕の顔なんかもう見たくないよね。でも心配しなくていい、寿々ちゃんを不快にさせた責任を取って、会社は辞めるつもりだから」

「そんな……っ、主任!？」

急転直下だった。

6

芹沢の言葉を聞いた寿々は大きいうるたえた。こっさりフェードアウトするつもりだったが、退職までしてほしいとは思っていない。

責任の取り方も想像以上だし、そうなたら一切彼に会えなくなるということにも衝撃を受けてしまったのだ。本当に、このまま彼を失ってもいいんだろうか。

慌てて体を捻^{ひね}って向かい合うと、芹沢は寿々から手を離し、遠くを見つめた。

「引き継ぎには少し時間がかかるから、その間は出社を許してもらえると嬉しいな。でもそれが済んだら、もう寿々ちゃんには一切顔を見せないから。本当にごめん」

「いやです！ 私、そこまでは望んでいませんっ！」

寿々は必死になって彼に縋^{すが}り付いた。つい先ほどまでぎゅっと抱き締められていたのに、今は誰よりも遠く感じる。ゴミさえ捨ててくれたら別に構わないのに、どうして離れて行ってしまっただろう。

うつすらと涙が浮かんだ目で見上げると、芹沢は苦しそうに吐き出した。

「……寿々ちゃんは優しいね。でも僕は、好きな子に嫌われたまま同じ職場で働けるほど神経が凶太くないんだ。だから、もう」

「す、好きです！」

「……は？」

このままでは二度と会えなくなる。そんな恐怖に取り憑かれ、必死になって言葉を紡いだ。

「主任のこと、ずっと好きだったんです。嫌いじゃないです！ ストロウのことを聞いてびっくりしちゃったけど、でも、どうしても嫌いになてなれなくて……。だから、だから私の前からいなくなるなんて言わないでください！」

一思いに言い切ると、その場に一瞬の沈黙が落ちる。驚いたように少しだけ目を見張って、芹沢はすっと真剣な表情になった。

「それ、意味わかって言ってる？ 今までみたいにただの上司と部下じゃいられないってことだよ」

静かに問う彼の茶色の瞳は険しい。でも自分だって、生半可な覚悟で引き留めた訳ではないのだ。いつもと違う鋭い雰囲気にならなれただけ怯^{ひる}みそうにならなれただけ、思い切ったことと頷く。

この程度の言葉で固い決意を翻^{ひる}してくれるだろうか。また拒絶されたらどうしよう。いつそのこと、ゴミ集めの趣味だって許容すると言ってしまおうか。

緊張のあまり、呼吸の仕方さえ忘れてしまったようだった。

体をぎゅうつと強張らせ震えていると、ふいに優しい腕が背中に回される。大切なものを包み込むような、ためらいがちな手つき。

そつと引き寄せられて、寿々は彼の胸元にとん、とぶつかった。

「寿々ちゃん……ほんとに？」

耳に馴染んだその声は少し弾んでいるように聞こえた。頭の上からぼつんと落ちてきて、縮み上がったいた寿々の心をじんわりと温かくする。

「ほんと、です」

「寿々ちゃん……っ！」

肯定すると同時に、強く強く掻き抱かれた。何度も名前を呼びながら頬を摺り寄せられる。彼の全身から気持ち伝わってきて、少しくすぐったい。

『嬉しい』『好きだよ』とうわ言のように呟く彼はなかなか寿々を放してくれなくて、なんだか一生分の愛をもらった気分だった。

「高野寿々さん、僕と結婚を前提にしたお付き合いをしてくれませんか」

気が済むまで抱擁を繰り返してから、芹沢は改まった態度でそう言った。抱き合っている最中には頬に触れるだけの軽いキスもされ、寿々は今、真っピンクの海の中にいる。

うっとりとして見下ろす彼の瞳は甘く柔らかな。寿々の返事は、もちろん決まっている。

「……はい、よろしくお願いします」

寿々が答えた途端、芹沢は花が綻ぶような笑みを浮かべた。背も高いし、細身に見えてがっしりとしている彼は間違いなく男の人なのに、“美しい”という表現がなにより似合ってしまう表情である。そんな人が自分だけのものになり、天にも昇る心地だった。

地味な町娘Bが王子様を射止めるとは、まさにシンデレラ・ストーリー。通勤中の駅で化粧品広告を見た時には絶対ありえないと思っていたのに、その日の夜にはこんな奇跡が起きるだなんて。

寿々は今、人生で一番幸せな瞬間だと感動していた。

心がふわふわして、胸がドキドキして、頬が燃えるように熱くなって、夢でも見ているよう。その、はずだったのだが。

蕩けるような甘い瞳で寿々を見つめていた芹沢は、次第に、にまーつと笑みを深くする。ん？と違和感を覚える間もなく、体に絡みついている腕の力がなぜかどんどん増していった。

「寿々ちゃん、もう取り消せないからね」

「……え」

その声色が獲物を呑み込む寸前の大蛇を連想させて、寿々はなんとなく背筋が寒くなった。なんだか、様子がおかしい気がする。

「あ、あの私……」

本能的に逃げ腰になっていると、突然真顔になった芹沢が寿々の背後に視線を向けた。そして、なぜかそちらに向かって話し掛ける。

「課長、聞きましたよね。証人ですよ」

「……………へ？」

証人？　ここに居るのは自分と芹沢だけのはずなのに？

一体誰に向けて話しているのかと彼の視線を辿ったところ、なんと六階のドアに長身の男が一人、急そうにもたれ掛かっているではないか。

「……ま、真山課長っ!？」

驚きのあまり、つい叫んでしまった。

まさかすべて見られていたのだろうか。寿々は顔面蒼白だ。

「課長、寿々ちゃんのキス顔見てませんよね？　もし見たなら今すぐ記憶から抹消してください」

「お前の顔しか見えてねえよ」

信じられない展開に呆然としている寿々の前で、なにやら親しげな会話が交わされている。

現実逃避中の寿々の脳みそは、そういえば入社当時の芹沢は、真山の下に配属されていたと聞いたことがあった、というどうでもいい記憶を呼び起こした。

「……ったく、新婚だつてのにまだ帰れない俺に見せつけやがって」

ブツブツと文句を言いながら降りてきた真山は、階段に落ちていた寿々の荷物を拾い集めてくれる。そしてぐいとバッグを差し出した。

「ほら、ラブシーンはよそでやれ」

「す、すみません」

ここ私が謝るとこだっけ？　と思いつつも、小心者の寿々は反射的に謝罪してしまう。そのまま

バッグを受け取ろうとしたら、芹沢にガツチリとその手を掴まれた。

「……………主任？」

寿々が戸惑って動きを止めると、彼は二人の間にぐいぐいと体を割り込ませてバッグを受け取る。どうしてそんな行動を取るのか、寿々は首を捻るばかりだ。

「お前、嫉妬深い男は嫌われるぞ」

「余計なお世話です」

苦笑いの真山と、ムツとしている芹沢。上役の前だというのに、彼は相変わらず寿々を囲い込んでいる。恥ずかしくて必死に逃れようとしたが、どうしても許してもらえなかった。じたばたと暴れてもビクともしない。

「久しぶりに見たが、お前の追い込み方は相変わらずえげつないな」

「失礼なことを言わないでもらえますか。交渉相手の感情に寄り添って譲歩を引き出させて叩き込んだのは課長ですよ。まあ、あの頃はまだ真山主任でしたが」

「はは、懐かしいな。もう七、八年も前の話か」

「ええ、交渉の基本を教えてもらいました」

追い込み方？　交渉相手？　頭上を飛び交う会話の内容に、寿々は目を見開いた。

感情に寄り添って譲歩を引き出すとは、まさに今、芹沢が寿々にやったことである。

呆気ないくらい簡単に籠絡されてしまった寿々だが、まさか彼の今までの殊勝な態度はすべて演技だったとも言えるだろうか。

「だ、騙だましたんですか!？」

勢いよく顔を上げた寿々は、責めるような視線を芹沢に向ける。ゴミを全部捨てると言ったのも、会社を辞めると言ったのも。すべて譲歩を引き出すための嘘だとしたら、それはひどい裏切りだ。簡単に乗せられてしまった自分も悪いが、あまりにも不誠実だと思う。

寿々が食ってかかると、芹沢は美しい顔に怪訝けげんな表情を浮かべた。

「……騙だました? いや、僕は本当のことしか言っていないよ。約束通り、集めたコレクションは全部捨てる。だって本物の寿々ちゃんが手に入るなら、代替品は必要ないだろう?」

「……………」

堂々と粘着質な発言をする芹沢はいつそ清々すがすがしい。

「で、でも、退職するつてうそまでついてました!」

「それも本当だよ。寿々ちゃんに嫌われたら会社にいる意味がないからね。その時は退職して自由になってから寿々ちゃんを捕まえて閉じ込めて、目隠しと手枷足枷てかせあしなかせのまま一生飼ってあげるつもりで……………ああごめん、これは冗談だから」

「っ……!」

とんでもない発言に寿々は固まった。本音が思いつきり漏れ出している。びっくりするくらい冗談に聞こえないところがすごい。

恐れをなして、『やっぱりお付き合いの件は一旦白紙で!』と言い残して逃げようとしたが、二歩も歩かないうちに捕まった。寿々の腰を引き寄せる芹沢は満面の笑みだ。

「こちら。ちゃんと証人がいるんだから取り消せないよ。それより寿々ちゃん、お腹すいてない? どこか食べに行こうよ」

「いえ、それは……………」

いやいや、そんな呑気のんきなことを言っている場合ではない。まずは先ほどの冗談に聞こえない冗談について話し合いを、と言いたいところだが、寿々も実はお腹がぺこぺこだった。

なにしろ昼食を食べてから約八時間、飲み物しか口にしていないのだ。本当なら今頃食べているはずだったおいしい海鮮料理を思い出して、お腹が小さくぐうと鳴る。

「僕もなにも食べてないんだ。寿々ちゃんが飲み会に来てないって聞いて、すぐこっちに帰って来たからね。一人で残業なんて大変だったでしょ。よくがんばったね」

「……………もしかして、会社にいたのは私のためだったんですか?」

なにか用があつて帰って来たのかと思っていたが、それは寿々のためだったらしい。

芹沢のいつもと変わらない優しさに、不覚にも胸がきゅんとする。お腹も空いたことだし、とりあえず食事には行ってしまおうかなと思ひ始めた。

空腹と身の安全の間で揺れる寿々に、芹沢が畳み掛ける。

「二人で落ち着いて食べられるところでしょう。いいところがあるんだ。残念ながらこの時間だと有名レストランのコース料理って訳にはいかないのが申し訳ないけどね」

「……………あつ」

さあ決まり、と手を取られた。

かなり強引だけれど、こうやって積極的に求められて正直嫌な気はしない。少々物騒な計画を立てていたことが判明してしまったが、やっぱりずっと好きだった芹沢主任には違いないのだ。優しいところも相変わらず。自分が気をつけてさえいれば、監禁される羽目にはならないだろう。

寿々はおいしい食事と甘い時間を想像して、ためらいがちに大きな手を握り返した。

「じゃ、じゃあ……食事だけなら」

「うん、ありがとう」

繋がれた手を見て嬉しそうに微笑んだ芹沢は、やっぱりかっこよかった。

物言いたげな真山に見送られ、街灯が明明と照らす大通りを並んで歩く。その道中、何度もこっそりと斜め上を見上げてしまったのは自分だけの秘密だ。彼は指と指を絡ませて手を繋ぎ、時折くすぐるように寿々の手の甲を擦る。

何気ない会話に頬を染めながら、もしかしてこれはデートなのではないかと気付いてさらに頬が熱くなった。

胸がいつばいで、これからご飯なんて食べられないかもしれない。

「寿々ちゃん、足は大丈夫？ 捻ってないかな」

「大丈夫です！ ほんとにちよつと、転んでしまっただけなので」

今から連れて行ってくれるのはどんなお店なんだろう。

二人きりで食事ができると言っていたから、個室居酒屋か、レストランのペアシートあたりか。

どちらにしろ、情報通の芹沢が選ぶ店ならば間違いはない。

7

食事を楽しみにしていた寿々だったが、芹沢が「ここだよ」と言って立ち止まった場所であんぐりと口を開けてしまった。

地下鉄の駅を出て徒歩十秒、有名ファッションブランドや老舗デパートが並ぶ大通りに面してそびえ立つその建物に書いてあったのは、黒地に白抜きの『Hotel cordial Tokyo』という格調高い文字。そこは、昨年開業したばかりの五つ星ホテルだったのだ。

「あ、あの、主任。ここで食事をするんですか!？」

なんのためらいもなく入り口に向かう芹沢に手を引かれ、寿々は焦って辺りを窺う。

都心の一等地に建つホテル・コर्टーディアルは、確か一般客室でも相当お値段が張るVIP御用達だったはずだ。

当然併設のレストランも格式高いため、スーツ姿の芹沢はともかく、ごく普通のオフィスカジュアル姿である寿々が入店するのは気が引ける。入店を渋られる可能性だつてあるだろう。

戸惑う寿々に対し、芹沢は平然としたものだった。

「どうかした？ あ、もしかしてこのホテルは趣味に合わないかな」

「いえっ、全然そうではなくて！ だって、ドレスコードがあるんじゃない……」

正面ドアに到達すると、待機していたドアマンが恭しくドアを開ける。芹沢は軽く手で制して案内を断った。寿々はびったり四十五度のお辞儀で見送るドアマンに会釈を返す。

不安のあまり繋いでいる手にぎゅっと力を込めたところ、彼が安心させるように微笑んでくれた。「大丈夫、二人きりなんだから服装は気にしないで。身内のホテルだし、そんなに硬くならなくていいよ」

「……えっ？ ご親戚が経営なさっているんですか？」

「うん、祖父が昔から旅館業を営んでいるんだ。僕は経営者って器じゃないから、ゆくゆくは弟が跡を継ぐ予定だけどね」

なんでもないように告げられた事実には寿々は目を丸くした。某大手ホテルチェーンの御曹司という話は根も葉もない噂だと思っていたが、本当だったらいい。

「あの、油田を持つって噂は……」

「資源・エネルギー部門の子に聞いたのかな？ まあひとつの投資先としてだよ」

「……………」

まさか本当に油田を持っているなんて思わなかった。

栢^{けたけ}の違いのセレブっぷりに衝撃を受ける寿々はロビーのソファに座らせ、芹沢は少し待っていて欲しいと言いつつフロントへ向かう。

二人きりで食事をすると言っていたから、レストランの個室を予約するのだろうか。いくら経営

者の孫とはいえ、突然やって来て個室を利用できるものなのかと不安になる。

フロントで手続きするうしろ姿をハラハラしながら見守っていたが、彼はすぐにこちらに帰ってきた。その表情から無事に個室が取れたことを悟った寿々だが、芹沢の口から発せられたのはまったく別の言葉だった。

「遅くなってごめんね。チェックインが済んだから上がろうか」

「はい！ ……つて、え、チェックイン!？」

品格が漂う空間に不釣り合いな叫び声を上げてしまった寿々は、慌てて自分の口を押さえる。レストランを利用するだけなら、チェックインは必要ないはずだ。それは、つまり……

「部屋を取ったんだ。食事は二人きりでルームサービスにしよう」

「えええっ!？」

口を押さえていたはずの手は全然役に立たなかった。

まさかの展開に驚いているうちにガラス張りのエレベーターに連れ込まれた。無情にもドアが閉まるとぐんぐん上昇する。逃げ場がない。

「本当は今日、飲み会で潰して前後不覚にしてから連れ込むつもりだったんだけどね」

次第に遠くなっていく夜のビル群をバックにしながらにこやかに告げられ、開いた口が塞がらなかった。獲物を自分のテリトリーに引き摺り込んだ安心感からか、さっきから彼は言葉を取り繕わなくなっている。

そして到着した先は、なんと最上階のロイヤルスイート。

確かに二人きりで食事ができるという言葉に偽りはないが、なにか別の部分が大きく間違っている。ついでに身の危険も迫っている。

広すぎる部屋に圧倒されていると、ルームサービスのメニュー表を渡される。そこに書かれたメニューは信じられないほど高額で、例えばお茶漬け一杯が三千円だった。純金製の米粒でも使っているのだろうか。

優雅に寛ぐ芹沢は美しい肉食獣のようで、寿々は恋心とはちよつと違う方向性のドキドキを感じながら夕食を取るようになってしまった。

8

「主任、今日はごちそうさまでした。まだギリギリ電車があるので、帰りは送っていただかなくても大丈夫です」

遅い夕食を食べ終わったあと、寿々は努めて事務的に挨拶をした。

散々迷った末に注文したのは、サンドイッチである。見るからに高級そうな皿に盛り付けられていたそれには柔らかいローストビーフがぎつしり挟まっついて、今までの人生の中で一番おいしいサンドイッチだった。

食事が終わったからには帰るのが当然だと言わんばかりの態度で、寿々はバッグを肩にかける。

だって今日は本当に食事だけのつもりだったのだ。

今座っている、これまた見るからに高級そうなソファから客室のドアまでは目測十五メートル。

このままにこやかに通り過ぎれば数秒で到着するだろう。そう見当をつけて足を踏み出したのだが――

「……………あつー！」

「ねえ、まさかこのまま帰る気じゃないよね？」

強い力で腕を掴まれ、寿々は小さく叫び声を上げた。

抑揚のない声に弾かれるようにして振り返ったところ、剣呑な表情の芹沢が目に入る。刺すような視線が気まずくて下を向くと、彼は寿々を引き摺りながら部屋の奥へと歩き始めた。

「主任っ!? え、ちよつと、あの……………」

「いいこと教えてあげようか。そうやって震えながら逃げ出そうとするのは逆効果だな。本当は大切に甘やかしてあげたいのに、ほんの少しだけ、本格的に泣かせてみたくなる」

「……………!!」

ブラウンとページュで統一された調度品の間を通り抜け、芹沢は分厚いオーク材のドアを乱暴に開ける。

その先の寝室に据えられているのは、巨大なキングサイズベッド。その存在感に圧倒されていると、きつちり整えられたベッドカバーの上に放り出される。

「きゃあああつ、待って！ 待ってくださいっ！」

「待たないよ。こんなところで焦らすなんて、寿々ちゃんって意外とSっ気があるよね」

芹沢について行くと決めたのは寿々だ。でもそれは、食事だけだと思っていたからであって……
間髪容れずベッドに身を乗り上げた芹沢は片手で寿々の両手首を拘束し、ストライプシャツのボタンをプチプチと外していく。いつもは穏やかな茶色の瞳には燃えたぎる欲望が見え隠れしていて、その視線だけで体の隅々まで犯されそうだ。

思わず目を逸らした直後、鎖骨を舐め上げるぬるりとした感触に体が跳ねた。

「ひゃうっ！」

「……ああ、可愛い声……」

うつとりと呟いて、芹沢の形の良い唇が寿々の首筋に埋まる。

柔らかい唇で薄い皮膚を食まれ、背筋がぞくりと栗立った。こんな感覚知らない。触れられた部分が火傷するように熱くて、うるさいくらいに脈打って。

どうしてだろう、お腹の奥がずくずくと疼いてくるようだった。

「あっ……あ、う……」

おもむろにきつく吸い付かれ、密着した部分がちくりと痛む。そこには紅い所有印が咲いているのだろうか。

無防備な胸元を満足げに見つめ、存在を確かめるように何度も舌を這わせる芹沢に、寿々は涙目で頭をふるふると振った。

食事をするだけのはずだったのに、一体どうしてこんなことになっているのか。

高すぎる天井も、華やかな薔薇のフラワーアレンジメントも、壁一面のガラスから見渡せる東京の夜景もまったく現実感がない。無駄に手触りの良いシートに押し付けられながら、寿々は必死にこの状況の打開策を考える。

日本語が通じるんだから、ちゃんと話せばわかってくれるはずだ。多分。

「ま、待って！ほんとにちよっと待ってください！こういうことは順序を追ってするものですよねっ!? まずは手を繋ぐところから始めませんか!」

中学生の恋愛かと呆れられそうだが、寿々の恋愛偏差値は限りなく低いだから許して欲しい。ホテルの部屋について来て『そんなつもりじゃなかった』が通用するかわからないが、突然エロモードに突入されても心の準備が追いつかないのだ。

「それからデートをして、三回目くらいでキスをして……それから……やんっ」

だがそんな懇願などお構いなしに、彼は派手な音を立てて頬や額にキスを降らせる。

未知のシチュエーションに頭が爆発して、肌を掠める唇に背筋がぞくぞくとして、つい鼻にかかった声を上げてしまった。

「どういう意味？ デートの回数は別としても、今言ったことは全部したよね」

「そ、それは」

寿々の悪あがきは一蹴された。確かに順序は多少前後しているが、階段室で軽いキスをされたし、ここに来るまでは手を繋いでいた。一緒に食事もした。納得はできないが反論も思い浮かばない。

そうするうちに手際の良すぎる芹沢がボタンをすべて外してしまい、下着だけの胸元を彼の目の

前に晒さらしてしまう。恥はずかしさで全身が、かあつと熱くなった。

馬乗りになっている芹沢は端整な顔に薄い笑みを浮かべる。

「もう四年以上付き合っているのに寿々ちゃんは何だいな。ここまで待った上に、まだお預けさせるの？」

うっとり細められた瞳は妖ましく煌きらめいていて、思わずその色気に目を奪われる。とはいえ、彼の言葉の中には、たつたひとつ聞き捨てならない言葉があった。

「付き合っ……!? それはただ同じ職場の人間としてで、個人的なお付き合いはついさつきからじゃないですか。私達、もつとお互いを知る時間が必要だと思っんです！」

——やつと突破口が見つかった。

だまし討うちに近い形だったが、実際の件は受け入れたいと思う。だってここまでされても、彼を好きな気持ちは変わらないのだ。

惚ほれたほうが負けとはよく言ったもので、寿々だつて好きな人とお付き合いできるのは嬉しい。

しかし二時間前に告白されたばかりで、すぐにベッドインなのはあんまりだ。普通なら体目当てと思われても仕方のない行為だろう。

だから、もう少しだけ心の準備をする時間が欲しい。そう一生懸命訴えると、芹沢はわずかに首をかしげた。

「僕は初めて会った時から寿々ちゃんだけを特別に想ってたよ？ だから同僚とか恋人とか、そういう世間せけん体ていに囚こわれた肩書きは無意味だと思っ。僕達ぼくたちずつと、運命の赤い糸で繋がったよね？」

「……………」

いや、多分繋がっていなかったと思っ。

なんらかの電波を受信していたと思っえない芹沢に、日本語は通じなかった。

9

でも、やっぱり……と食い下がろうとしているうちに、寿々のブルーストライプの七分袖シャツは宙を舞う。

悲鳴と共に体を丸めて胸元を隠すと、その隙に背中の中のホックを外された。すかさず剥むき出しの肩口に舌が這はい、ぎゅつと抱き締めているブラジャーの下には芹沢の大きな手が滑り込む。

「やあん……っ！」

あまりの手際の良さに、まったく太刀打ちできなかった。気分はさながら、へビに丸呑みされる間際の野ねずみである。

「んっ……う……、ひどいですっ」

「そんなに濡れた目で睨にらんでも可愛いだだけだよ？」

精一杯の抵抗は捕食者を喜ばせる結果にしかならなかったらしい。喜びを隠しきれない芹沢の声はキャラメルのように甘ったるくて、寿々の脳内をじわじわと侵食する。